



船津 康次

トランスコスモス
取締役会長兼CEO



激動時代の
ダブリン大学留学

1991年から1992年の1年半、当時の勤務先リクルートから、海外留学をさせていただいた。学生時代からの海外留学の夢が39歳にしてかない、本当にうれしかった。留学先はリクルートらしく自由に設定できた。米国のことは分かっているような気がし、米国の源流となった欧州のことを学びたいと思った。調べてみると、欧州にEC (European Community : 現在のEU) 本部がサポートし、ECの法律、政治、経済を教える講座が、独、仏、アイルランドにあった。アイルランドだけが英語での授業だったので、ダブリン大学大学院のCEEPA (Center for European Economic & Public

Affairs) に行くことにした。

1991年の欧州は、1989年にベルリンの壁が崩壊し東側から西側に人が動き、新たな時代を感じさせるざわさわした状況だった。授業の合間を縫って欧州中を見て回ろうと旅したが、1991年のクリスマスに滞在した厳戒下のモスクワは食べるものも不自由な厳しい状態だった。通貨は下落、ポリショイ劇場のチケットは100円以下で買えた。モスクワを離れた2日後、ソビエト連邦は解体した。一方、ECは1992年、オランダ

のマーストリヒトにおいて欧州単一市場、単一通貨への道筋を決定した。

クラスの学生数は12カ国から25人、半分が欧州・米国から、半分が非英語圏国からだった。トルコから3人が来ていたが、「トルコはこんなにNATOに協力しているのに、なぜECメンバー国になれないのか」がよく議論になった。ECが基本とするキリスト教的基本的人権と、イスラム教的基本的人権の考え方の違いが根底にあった。あれから20数年、当時12カ国だったECは28カ国に拡大したが、トルコは今もメンバー国ではない。

大陸に引かれた目に見えない国境線を何度も越えて、初めてそれがどんなものなのかを実感できた。現在、世界の多くの国が、宗教等を背景に価値観の違いを乗り越えることができないでいる。われわれ経済人は、グローバルな経済活動を通じ、世界の人々をしっかりとつなぐ懸け橋でありたいと思う。



非英語圏のクラス仲間：
20代から40代と年齢もさまざま(右から3人目が私)



厳寒のモスクワ：
寒くて帽子を購入。1円のピロシキはおいしくなかった



ベルリンの壁：
崩壊間もない壁の一部がモニュメントに